

連載 千座の置き戸（ちくらのおきど）

第二百六十一回 教育思想の変遷 その一

南出喜久治（令和7年2月1日記す）

バーカー、フレーベル、エレン・ケイ、モンテッソーリなどによる19世紀後半の進歩主義教育運動といふのがあつた。そして、これを教育論として完成したとされるのが、哲学者ジョン・デューイである。

しかし、教育の本質は不易であり、情報や知識の内容や履修技術が変化しても、それによつて本質が変はることはない。本質を見失ふやうな進歩といふのはあり得ない。

工業化が押し進んだこの時代は、何でもが新しくなり、それが進歩であるとする妄想に駆られてゐた。

進歩主義といふのは、進歩が常に正しいといふ前提に立つ。進歩とは望ましい発展といふ意味なのであるが、時間が経過することによつて新しいものが現れても、それが正しいものとは限らない。そして、それが進歩、発展であるといふ保証もない。時間の経過に伴つて、後退し、墮落し、劣化するものもある。生物にとつて、個体の死と新たな生命の誕生とを繰り返すことによつて種は存続するが、自然淘汰で絶滅したりする。時間の経過とは個体にとつては老化であり、死に近づくことであつて、このことを進歩とは言はない。それにもかかはらず、時間の経過によつて生まれる新しいものは常に正しいとするのが進歩主義といふ虚構である。

デューイの教育思想は、児童中心主義である。児童中心主義といふのは、子供の自主性に任せる放任思想である。快樂に溺れて娼婦に産ませた5人の子供すべてを孤児院に遺棄したルソーが説く「親はなくても子は育つ」といふ人でなしの教育思想を引き継いでゐる。

哺乳類である人間は、種族を維持するために子どもに生きる知恵と経験を授けて伝承させて生き続ける。親が子の教育をしなければ子は育たない。個体として大人となつても、種の集団の中では生きていけない。孤立して野垂れ死にするだけである。

子は親の世話なくして自分一人で大人に成長できない。ゴキブリのやうな卵生動物のやうに孵化すればそのまま自立した生活できる生物とは違ふ。

にもかかはらず、卵生動物と同じやうに、子は親の教育を受けずに勝手に成長するのが進歩だとする児童中心主義といふのは、親の干渉を一切否定して、教科書否定、座学否定、集団学習否定、権威否定、知育軽視、子どもの自由尊重、子どもの自主性尊重、子どもの個性尊重などを唱へた。

我が国でも、子供にゆとりさへ持たせれば、小・中・高等学校で問題解決型の思考能力の育成ができると考へた机上の空論である「ゆとり教育」とか「問題解決型学習」なるものがあつたが、結局は、児童中心主義の弊害が露はとなつて失敗に終はつた。「叱るより褒めろ」といふ倒錯した思想によつて、集団生活の規律が身に付かない子供が増えた。しかし、それでも児童中心主義が現在もなほ教育界を支配してゐる。

アメリカでは、アイゼンハワーワー大統領が昭和34年に雑誌「ライフ（Life）」でデューイ教育を問題視し、Back to the Basic!（基礎に戻れ!）の声が上がつたが、左翼リベラル思想が根強いため、基礎教育の軽視、理系の軽視は続き、学力の低下、校内暴力、犯罪率が急増し、自由放任のヒッピーや薬物中毒が蔓延して倫理観の欠如を招いた。

しかし、レーガン大統領の登場により、昭和56年にT・H・ベル教育相長官が設置した「教育の優秀性に関する全米審議会」が2年後に発表した「危機に立つ国家」によつてデューイ思想による左翼リベラル教育と決別を図つた。

また、イギリスも保守党のサッチャー政権の誕生により、昭和63年の改革教育法によつて、デューイ思想と決別したサッチャー教育改革が実施され、それは、労働党のトニー・ブレア政権でも引き継がれた。良いものは良いといふ判断である。

アメリカ、イギリスの教育改革は、一言で言へば、日本の修身教育に習へといふことであり、これによつて教育が健全化されたが、わが国では、これとは逆に、GHQの日本弱体化政策のためにデューイ思想が席卷して我が国の教育の崩壊は進み、今日に至つてゐるのである。